

夏秋作用

トマトキバガの防除対策について

ハウス内でトマトキバガの発生が認められた場合には、地域への定着を防止するため、以下の対策を行いましょよう。

トマトキバガの野外への拡散を防ぐために・・・

1 薬剤防除を行いましょよう。

※現在、登録農薬（トマト・ミニトマトのみ）による防除が可能です。

2 被害果や被害葉には幼虫が潜んでいる可能性があるため、除去して土中深く埋設するなど適切に処分しましょよう。

※野外にそのまま放置することは避けましょよう！

3 選果は入念に行い、穿孔痕が見られる果実は徹底して除去しましょよう。※特にヘタ周辺の穿孔痕は気づきにくいので注意しましょよう。

4 栽培終了後は、速やかに株を枯死させ、ハウス内のトマトキバガを餓死させましょよう。

<留意点>

(1) ハウスの開口部を古ビニール等で被覆して、ハウス内にトマトキバガを閉じ込めた状態で行いましょよう。

(2) 果実はすべて株から取り除き、土中深く埋設するなど適切に処分しましょよう（果実内に潜伏する幼虫は長期間生存する可能性があるため）。

(3) ハウス内の雑草は生息場所となり得るため必ず除草しましょよう。

(4) 餓死させる期間は1か月以上継続し、その後ハウス内の片づけを行いましょよう。

5 株を叩くなどして、トマトキバガの成虫が飛び回らないことを確認した上で、ハウス内の片づけ（残さのすき込みなど）を行いましょよう。

<留意点>

(1) 残さをハウス外に持ち出す場合は、土中深く埋設するなどして処分しましょよう。野外にそのまま放置することや堆肥化は避けましょよう。

(2) ハウス内の片づけは年明け後に行いましょよう（年内に行うと、ハウス内のトマトキバガが野外に拡散する恐れがあります）。

6 次作の準備を始めるまで、ハウスの開口部は古ビニール等で被覆しておきましょよう。

冬春作用 トマトキバガの防除対策について

トマトキバガのハウス内への侵入・定着と発生時の野外への拡散を防止するため、以下の対策を行いましょよう。

トマトキバガのハウス内への侵入を防ぐために・・・

- 1 ハウスのサイド開口部や谷換気部は、目合い1mm以下の防虫ネットで被覆しましょよう。
- 2 出入口はきちんと閉めて作業しましょよう。

もしトマトキバガの発生が認められた場合には・・・

3 薬剤防除を行いましょよう。

※現在、登録農薬（トマト・ミニトマトのみ）による防除が可能です。

- 4 被害果や被害葉には幼虫が潜んでいる可能性があるため、除去して土中深く埋設するなど適切に処分しましょよう。

※野外にそのまま放置することは避けましょよう！

- 5 選果は入念に行い、穿孔痕が見られる果実は徹底して除去しましょよう。※特にヘタ周辺の穿孔痕は気づきにくいので注意しましょよう。

- 6 栽培終了後は、速やかに株を枯死させ、ハウスを密閉し、ハウス内のトマトキバガを餓死させましょよう。

<留意点>

(1) 密閉は1か月以上継続しましょよう。

(2) 果実はすべて株から取り除き、土中深く埋設するなど適切に処分しましょよう。

(3) ハウス内の雑草は生息場所となり得るため必ず除草しましょよう。

- 7 十分な密閉期間が経過し、トマトキバガの成虫が飛び回らないことを確認した上で、ハウス内の片づけ（残さのすき込みなど）を行いましょよう。

※残さをハウス外に持ち出す場合は、焼却するか土中深く埋設して処分し、堆肥化は避けましょよう。

- 8 次作の準備を始めるまでハウスは密閉しておきましょよう。

別添2 トマトキバガの形態と被害の特徴

図1 トマトキバガ成虫



図2 トマトキバガ幼虫と蛹



図3 トマトキバガによるトマト葉の食害



図4 トマトキバガによるトマト果実の食害



図5 トマトキバガの食害と他害虫の食害の比較



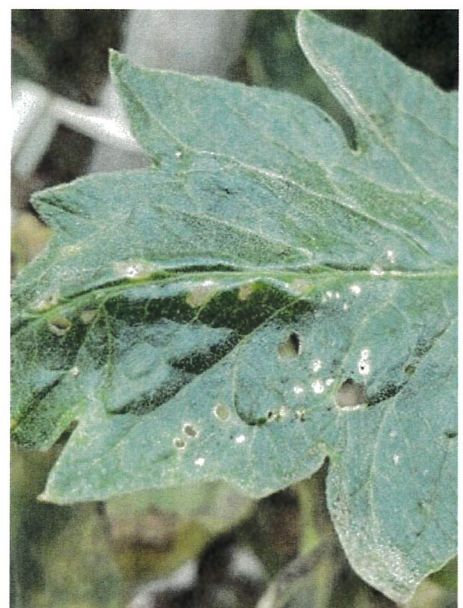
トマトキバガ

- ・面的に食害される。
- ・葉の内部を食害し表皮のみを残すので、葉が透けて見える。
- ・糞が一か所に固まっている。



トマトハモグリバエ

- ・線的に食害される。
- ・糞が食害の筋上にある



ハスモンヨトウ・
オオタバコガ

- ・葉の所々に穴が空く。
- ・糞が葉の表面にある。

令和6年(2024年)9月27日

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

トマトキバガの発生状況と防除対策(技術情報第13号)について(送付)
このことについて、下記のとおり取りまとめましたので、業務の参考に御活用ください。

記

県内各地に設置したトマトキバガのフェロモントラップへの誘殺が過去2ヵ年より多い状況が継続している。現在、夏秋トマトと冬春トマトの栽培が重なる時期であるため、各産地において施設に害虫を入れない対策・出さない対策を徹底する。

1 現在の発生状況

- (1) 県内6ヶ所に設置したトマトキバガのフェロモントラップにおいて、成虫の誘殺が4月から継続的に確認されている。いずれの地点も令和4年度、令和5年度の同時期より誘殺数が多い状況が継続している(図1)。
- (2) 現在、ほ場での発生・被害は見られないが、今年度は夏季にトマト・ミニトマト栽培ほ場で2例の食害が確認されている。
- (3) 過去2ヶ年の調査結果から、10月以降に誘殺数が増加する傾向にあることから、本年も今後さらに誘殺数が増加する可能性がある。

2 トマトキバガが寄生する作物

トマト、ミニトマト、ナス、バレイショ

3 防除対策等

- (1) 夏秋作でハウス内での発生が認められた場合、栽培終了後は速やかに株を枯死させ、1ヶ月以上かけてハウス内のトマトキバガを餓死させる。なお、マルチ等の資材にも、蛹や成幼虫が付着している可能性があるため、使用した資材はこの期間が終了した後、に搬出する(別添1-1「トマトキバガの防除対策について(夏秋作用)」を参照)。
- (2) 冬春作の施設栽培では、開口部に防虫ネット(目合1mm以下)を設置し、侵入を防止する(別添1-2「トマトキバガの防除対策について(冬春作用)」を参照)。
- (3) 被害の特徴を把握し(別添2:図3~5)、ほ場内をよく見回り、見つけ次第捕殺する。
- (4) 被害葉や被害果実を発見した際は、速やかにほ場内から除去する。除去した被害葉などを野外に放置すると周囲に拡散するため、土中に深く埋設するか、ビニール袋などに入れ、生きた虫が見つからなくなるまで一定期間密閉した上で適切に処分する。
- (5) 薬剤防除にあたっては、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。なお、現時点の農薬登録はトマト、ミニトマトのみであるので注意する(表1)。
- (6) ほ場内での発生が疑われる場合、管轄の農業普及・振興課やJA、病害虫防除所まで連絡する。

(7) 秋期は、ハスモンヨトウやオオタバコガ等、他のチョウ目害虫の発生も増加しやすい時期である（詳細は病害虫防除所ホームページ <https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/258274.pdf> 参照）。それらの害虫も含め、施設へ入れない・出さない対策や、薬剤防除等を徹底する。

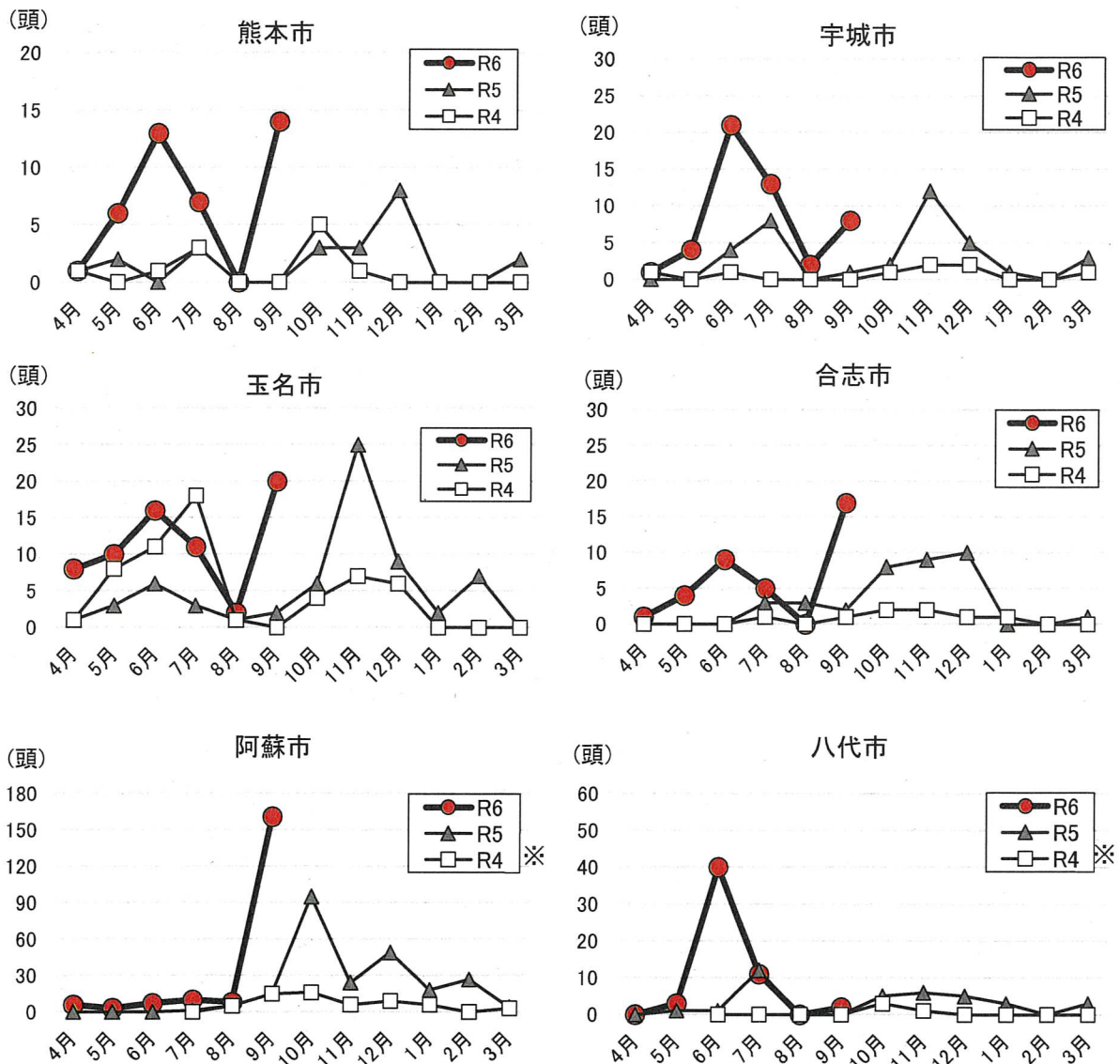


図1 各地域に設置したフェロモントラップへのトマトキバガの月別誘殺数の推移(R6の数値は9月24日時点の暫定値)
 ※阿蘇市のR4は7月19日から、八代市のR4は6月15日から調査開始。
 (調査の一部はイノベーション創出強化研究推進事業(JP007097)において実施した)

表1 トマトキバガに登録のある農薬(令和6年9月26日時点)

農薬の名称	登録の有無		IRAC コード※	農薬の種類	使用時期	希釈倍数 /使用量	使用 方法	使用 回数
	トマト	ミニトマト						
ディアナ SC	○	○	5	スピネラム水和剤	収穫前日まで	2500～ 5000 倍	散布	2回 以内
ラディアント SC	○	○		スピネラム水和剤	収穫前日まで	2500～ 5000 倍	散布	2回 以内
ダブルシューターSE	○	○		脂肪酸グリセリド・ スピノサド水和剤	収穫前日まで	1000 倍	散布	2回 以内
アフーム乳剤	○	○	6	エマクチン安息香 酸塩乳剤	収穫前日まで	2000 倍	散布	5回 以内
アグリメック	○	×		アバメクチン乳剤	収穫前日まで	500～ 1000 倍	散布	3回 以内
アニキ乳剤	○	○	6	レピメクチン乳剤	収穫前日まで	1000 倍	散布	3回 以内
エスマルク DF	○	○	11A	BT 水和剤	発生初期,但し 収穫前日まで	1000 倍	散布	—
チューンアップ顆粒水和剤	○	○		BT 水和剤	発生初期,但し 収穫前日まで	2000 倍	散布	—
コテツフロアブル	○	○	13	クロルフェナピル 水和剤	収穫前日まで	2000 倍	散布	3回 以内
トルネードエースDF	○	×	22A	イントキサカルブ 水和剤	収穫前日まで	2000 倍	散布	2回 以内
ファイントリム DF	○	×		イントキサカルブ 水和剤	収穫前日まで	2000 倍	散布	2回 以内
アクセルフロアブル	○	○	22B	メタフルゾン 水和剤	収穫前日まで	1000 倍	散布	3回 以内
ベネビア OD	○	○	28	シアントラニプロール 水和剤	収穫前日まで	2000 倍	散布	3回 以内
ベリマーク SC	○	○		シアントラニプロール 水和剤	育苗期後半～ 定植当日	400 株あ たり 25ml	灌注	1回
プリロツソ粒剤	○	○		シアントラニプロール 粒剤	育苗期後半～ 定植時	2g/株	株元 散布	1回
プリロツソ粒剤オメガ	○	○		シアントラニプロール 粒剤	育苗期後半～ 定植時	2g/株	株元 散布	1回
フェニックス顆粒水和剤	○	○		フルベンシアミド 水和剤	収穫前日まで	2000 倍	散布	2回 以内
ヨーバルフロアブル	○	○		テトラニプロール 水和剤	収穫前日まで	2500 倍	散布	3回 以内
グレーシア乳剤	○	○		30	フルキサメタミド乳剤	収穫前日まで	2000 倍	散布
プレオフロアブル	○	○	UN	ピリタリル水和剤	収穫前日まで	1000 倍	散布	2回 以内

※ IRAC コードとは、殺虫剤の有効成分を作用点と作用機構から分類した番号や記号のことで、
本コードが異なる薬剤を使用することにより、同一系統の薬剤の連用を防ぐことができます。

熊本県病害虫防除所
 (熊本県農業研究センター 生産環境研究所内)
 担当：江口、福岡
 TEL 096-248-6490 FAX 096-248-6493